

中高生向けSDGs教材

SDGs TODAY

Supported by 

「水」をテーマに SDGsを学ぼう



6 安全な水とトイレ
を世界中に



14 海の豊かさを
守ろう



- **国際** 世界の水問題、現状は？ P2-3
- **国内** 「水都・大阪」シンボルの道頓堀川 もっとキレイに P4-5
- **社会** 2025年大阪・関西万博に迫る P6
- **地域** 私たちにもできるSDGs P7
- プロジェクトに参加した阪大生の編集後記 P8

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



SDGs (エスディー・ジーズ) とは？

「SDGs」とは、2015年に国連が全会一致で採択した「Sustainable Development Goals (持続可能な開発目標)」の略称です。「貧困をなくす」「気候変動に具体的な対策を」「産業と技術革新の基盤をつくる」といった17項目と、それらを達成するための具体的な169のターゲットで構成されています。

川の水をポリタンクで運ぶ子供たち。水不足に直面する多くの国で、水くみの重労働が女性や子供たちにのしかかる



6 安全な水とトイレを世界中に



世界の水問題、

清潔な水、トイレ、そして正しい衛生習慣。国際NGO「ウォーターエイド」は、この三つを世界各地に届けることを目的に活動を続けている。きれいな水とトイレは現地では生きる人々を健康にさせる。やがて衛生習慣が身につくことで生活の質の向上にもつながるといえる。

水はすべてのゴールの基礎

国連児童基金(ユニセフ)などによると、世界では10人に1人にあたる約7億8500万人が清潔な水を利用できず、4人に1人の約20億人がトイレのない劣悪な環境で生活している。

SDGsゴール6では、2030年までに「安全な水とトイレを世界中に」という目標が掲げられている。ウォーターエイドジャパン



高橋 郁氏 (中央)

水くみから解放される女性や子供たち

支援した国の一つ、東南アジア・東ティモールの山岳地帯。ここでは川の水を生活用水に利用している。往復2時間の水くみは女性や子供の日課だ。10歳前後の子供が重さ10kg程度のポリタンクを抱えて険しい坂道を往來する。そのうえ川の水は汚れているため、常に腹痛に悩まされていた。

ウォーターエイドはこの村で、行政や住民と協力して数ヶ所に

する給水管を含む給水施設を整備した。水くみから解放された女性たちは畑を耕すようになり、トマトなどの野菜を栽培した。各家の裏に青々とした畑が広がり、支援前とは見違える光景になった。

高橋さんは「支援した多くの地域で、水と食事が改善されたことで、子供たちは健康になっていった。水くみから解放され、学校にも通えるようになった」と話す。

水は生活を変えるパワー

また、インドの村では家庭にトイレがなく、住民たちは野外で用を足すしかなかった。村にはハエがたくさん飛んでいて、不衛生な環境だった。この村にトイレが設置されると、住民たちはさらに村を衛生的にしよと、台所のごみの分別に取り組むようになっていた。トイレ

ができたことにより、人々の衛生習慣が変わっていくという好例だ。高橋さんは、自ら生活を変えていく住民たちのパワーに毎回驚かされた。水や衛生問題を解決することは、飢餓や貧困、子供の教育など様々な問題解決と密接に関わっていることを伝えたい

地域の実態に合わせて

ウォーターエイドの支援は設備の整備にとどまらない。整備しても維持管理ができず、故障したまま放置されるというケースも多いからだ。その地域で水問題が起きている根本的な原因を確かめたうえで、支援の初期段階から住民たちにもプロジェクトに参加して

もらう。そうすることで、自分たちの設備という意識が強くなり、率先して維持しようとする意欲が生まれるからだ。政府や行政に対しても、水源のデータを蓄積できるオンラインツールや水質検査の技術研修など、仕組みづくりの導入や人材育成の後押しをしている。

国が違っても命の重さは同じ

先進国では「水問題」が思ったより注目されておらず、優先的に取り組む国は少ない。新型コロナウイルスの感染拡大で、日本では手洗い・うがいの徹底で死者数を抑えられているが、それは清潔な水がすぐに使える環境があったことだ。

高橋さんは時折、20年くらい

前、学生時代に会ったウガンダの子供たちに思いをはせることがある。「生きているのかなあ、と思う。日本の子供なら、生きているのは当たり前で、そんなふうには思い出すことはない。生きている国、環境が違うだけで命の重さが違う。それがウォーターエイドで働く私の原点だ」

ウォーターエイドとは?

1981年にイギリスで設立され、水・衛生分野に特化して活動。世界34か国に拠点を置き、アジア、アフリカ、中南米など26か国で支援プロジェクトを実施している。

日本で喜ばず私たちにとって、水はいつも身近にある。だが、アフリカ、アジアなどの国々では、不衛生な水で毎年30万人の乳幼児が命を落とす。世界の貧しい国を支援する人たちの活動を通じて、その存在の尊さを改めて見つめ直してみたい。

WaterAid/ Joey Lawrence

世界の水環境を支える日本の国際貢献



世界から称賛

「プノンペンの奇跡」と語り継がれている事業がある。1990年代、長年の内戦によって荒れはてたカンボジアの首都・プノンペンでは、人々の暮らしを支える水道が劣悪な状況にあった。

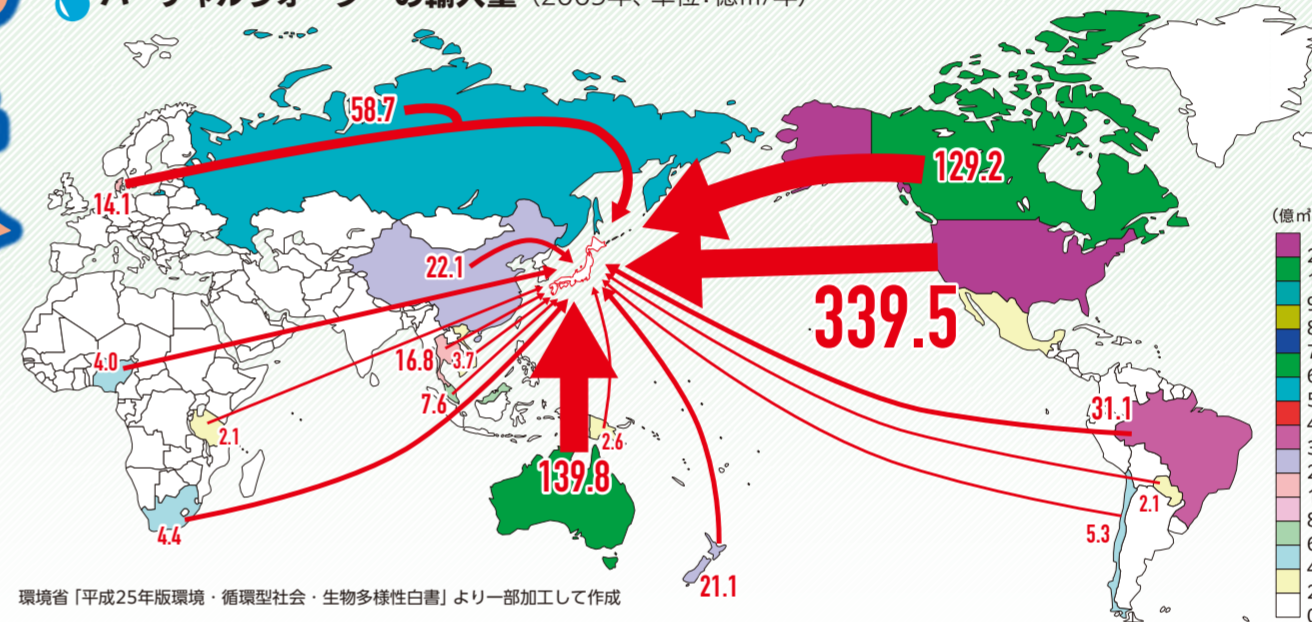
しかし、プノンペンの水道は国際支援によって劇的に生まれ変わる。93年には9割に達し、1日10時間しか使えなかった水

道はいつでも使えるように。水質もアジアでは珍しい「蛇口の水を直接飲める」という高いレベルに改善され、世界から奇跡とたたえられた。

この発展を支えたのが、JICA(国際協力機構)を中心とする日本の支援だ。1993年から現地でも活動を開始。水道の運営などにノウハウを持つ福岡県北九州市などと協力し、技術者の指導や育成を続け、プノンペンの水道の礎を築いた。カンボジアでは今、日本の支援で教育を受けた人材が中心となり、プノンペンをモデルに他の都市でも水道の整備を進めている。

現状は?

バーチャルウォーターの輸入量 (2005年、単位:億m³/年)



環境省「平成25年版環境・循環型社会・生物多様性白書」より一部加工して作成

バーチャルウォーターとは?

輸入した食料や工業製品などを、仮に日本で生産したとすれば、どのくらい水を使うかを試算した推計値。例えば、1kgのトウモロコシの生産には水1800ℓ、飼育に穀物が必要な牛の肉1kgには約2万ℓの水が必要だ。食料自給率(カロリーベース)が40%程度の日本は海外からの輸入が多く、その分、生産国の水を消費している。海外での水の不足や汚染などの問題は、日本と無関係ではないのだ。

水

問題は様々な問題と複合的に絡んでいます。発展途上国での人口増加によって食料や水の需要は増える一方で、気候変動により雨の降り方が変わり、使える水が減るかもしれません。

水不足は、そうした地域の経済や社会の発展を妨げる要因となり、その結果もたらされる社会不安や食料不足の影響は、日本はもちろん、世界中に波及します。だからこそ早急に改善する必要があります。

日本ではいつでも安全な水が使えますが、決して水が豊かなわけではありません。水源の管理など、昔からの水を確保する努力や適切に管理する仕組みが、今の私たちの暮らしを支えているのです。

しかし、世界にはその仕組みがない、あってもうまく運営できていない国がたくさんあります。そうした国への支援は、施設を作るだけではなく、人材育成な

ど現地の人の力で管理できる仕組み作りが重要です。水を上手に管理してきた日本だからこそ貢献できるのです。

水問題の解決には、SDGsで取り組む貧困撲滅や健康の確保など、他の課題にも一緒に取り組む必要があります。ですが、SDGsの究極の目標は「全ての人が、より幸福に暮らせる社会」の構築です。皆さんは、それぞれが大事だと感じる取り組みから始めていただければ良いと思います。

例えば、値段よりも環境に優しい製品を購入したり、選挙権を得れば環境政策を訴える候補者に投票したり、皆さんの意識的な取り組みで、社会は着実に変えられます。様々な問題を意識して考え、仲間と話し合い、自分自身のタイミングでぜひ行動してください。

先生教えて!

「水」から考える持続可能な開発について



国連大学 上級副学長 沖 大幹氏

WHO/UNICEF JMP (2019) Progress on household drinking water, sanitation and hygiene 2000-2017. Special focus on inequalities.

「水都・大阪」

シンボルの道頓堀川 もっとキレイに

大阪きっての繁華街・ミナミ。その中心部を流れる道頓堀川で、長年にわたる地道な取り組みが実を結び、水質の改善が進んでいる。水辺の遊歩道も整備されており、2025年の大阪・関西万博に向け、「水都・大阪」のシンボルに注目が集まる。

水質浄化を実現 大阪市の取り組み

- ① きれいな大川の水を取り込む
- ② 汚泥を取り除く

巨大でユニークな看板が川沿いを彩り、海外の観光客からも人気が高い道頓堀川。1950年代以降、家庭や工場から排出される汚水で水質が悪化。

そこで、川を管理する大阪市は、道頓堀川下流部、南北につながる東横堀川上流部に水門を建設。潮の



東横堀川水門

満ち引きを利用して門を開閉し、比較的きれいな大川の水を取り込むようにした。さらに、川底の汚泥を定期的に取り除く作業を行ってきた。

こうした様々な取り組みが功を奏し、水の汚れの目安とされるBOD（微生物が消費する酸素量）が大幅に改善し、1日あたり3^{mg}・L以下に安定。環境基準値（B類型）を満たす水準を保つようになってきた。

「BOD」とは? biochemical oxygen demand (生物化学的酸素要求量)の略。水中の汚濁物質が微生物によって分解されるとき必要とする酸素の量をいい、数字が大きいほど水が汚れていることを示します。

- ③ 汚水を地下50mにためる

下水道が整備されて以降も、雨水と汚水を同じ下水道管に集めて流す「合流式下水道」のため、大雨が降ると処理しきれなくなった汚水が川に流れ込み、水質改善が課題になっていた。

そこで、合流式下水道の改善策として、汚水約14万^{トン}を一時的にためることができ「平成の太閤下水」を地下50mに整備。施設の供用を開始した2015年度以降、大雨でも汚れた水が川に流れ込んだことはない。

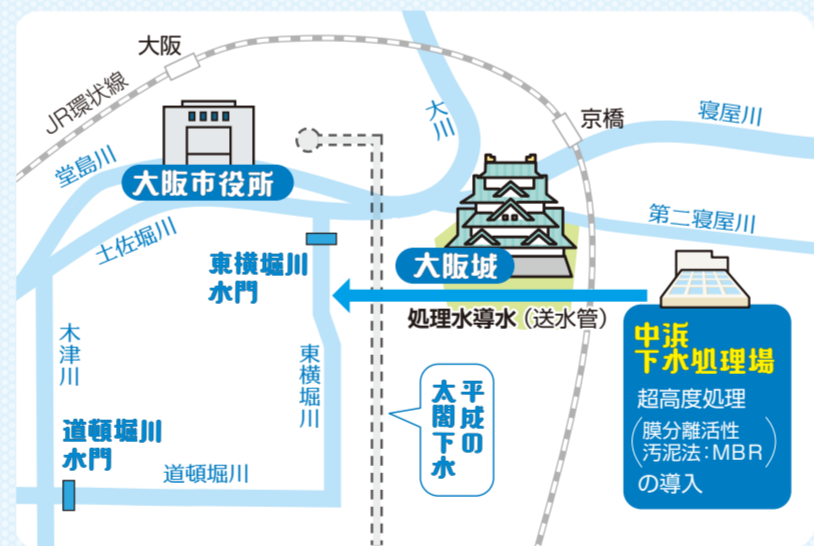


建設時の「平成の太閤下水」

- ④ 超高度処理水を導水する

大阪城の東に位置する「中浜下水処理場」の改修工事にあわせ、最新の下水処理技術「膜分離活性汚泥法 (MBR)」の導入が進んでいる。この技術を使えば、微細な穴がたくさんあいた膜により、汚水から汚れや細菌を分離することができ、透視

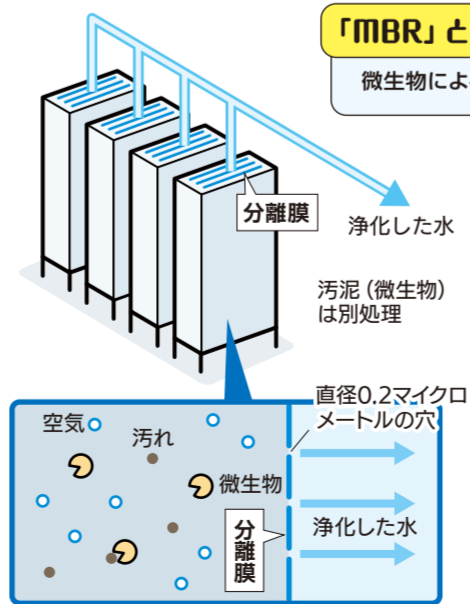
度※の高いきれいな水にすることができる。さらなる水質の改善を目指して、MBRで処理された水は、送水管を通して大阪城の外堀などに加え、東横堀川から道頓堀川に送水される予定で、21年度中の運転開始を目指している。



大阪市の担当者は「多くの人は飲む水には関心を払っても、使った後の水にはあまり目を向けない。下水の最新処理技術で生成される超高度処理水で、大阪の顔でもある道頓堀川の魅力向上に貢献することで、大阪から世界に水の再利用の大切さをアピールしたい」と力を込める。

※透視度…水のきれいさを表現するための指標。河川や湖沼の水や排水の調査などにおいて利用される。この数値が高いほど、水が澄んでいることを表す。

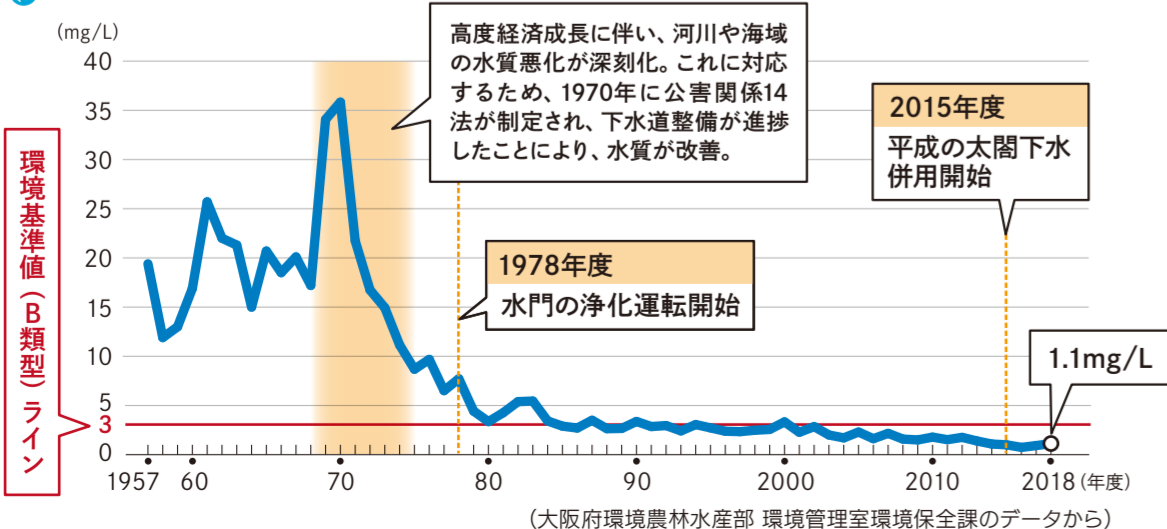
「MBR」とは? Membrane Bioreactor (膜分離活性汚泥法)の略。微生物による生物処理と膜による固液分離処理を組み合わせた浄化技術。



完成イメージ

中浜下水処理場 2021年度 運転開始

道頓堀川のBOD測定結果



まめ知識 ① ちにわの顔、道頓堀川って?

道頓堀川は豊臣秀吉の時代、成安道頓という人物が中心になって掘った運河で、それが川の名になった。私財をなげうって工事を指揮した道頓の功績を知らせるため、川に架かる橋のたもとには、今も碑が残る。

17世紀後半以降は、後に「道頓堀五座」と呼ばれる芝居小屋が川沿いに軒を連ね、上方演劇の中心地となった。歌舞伎や人形浄瑠璃が人気を博し、近松門左衛門の「曾根崎心中」などが初演された。

道頓堀商店会副会長で、お好み焼きチェーン店「千房」の中井貫二社長は「舞台小屋で芝居を見て、おいしいものを食べて帰る。食とエンターテインメントの街が道頓堀だった」と話す。同商店会では、



道頓堀商店会副会長 中井貫二さん

「食べ倒れの街・道頓堀をアピールしよう」と、「一寸法師・お椀の舟レース」=写真=を企画したことがある。おとぎ話の「一寸法師」には、

お椀を舟に、箸を櫂にして川を上り、都(京都)へ向かう場面があるが、その川にそが道頓堀川という説にちなんだイベントだ。



水質浄化の取り組みとともに、遊歩道「どんぼりリバーウォーク」が川辺に整備され、おしゃれなオープンカフェも続々と出店。外国人観光客の人気スポットとして紹介されるようになり、2018年はクルーズ船の利用者が年間100万人を超えた。

中井社長は「川の真ん中にステージを設け、対岸の観覧席からダンスやライブを楽しめ、こんな絵になる空間はない。大阪・関西万博ではぜひ、特設会場として活用され、訪れた人たちに最高のおもてなしを届けたい」と声を弾ませる。

世界の水問題を解決する「MBR」技術

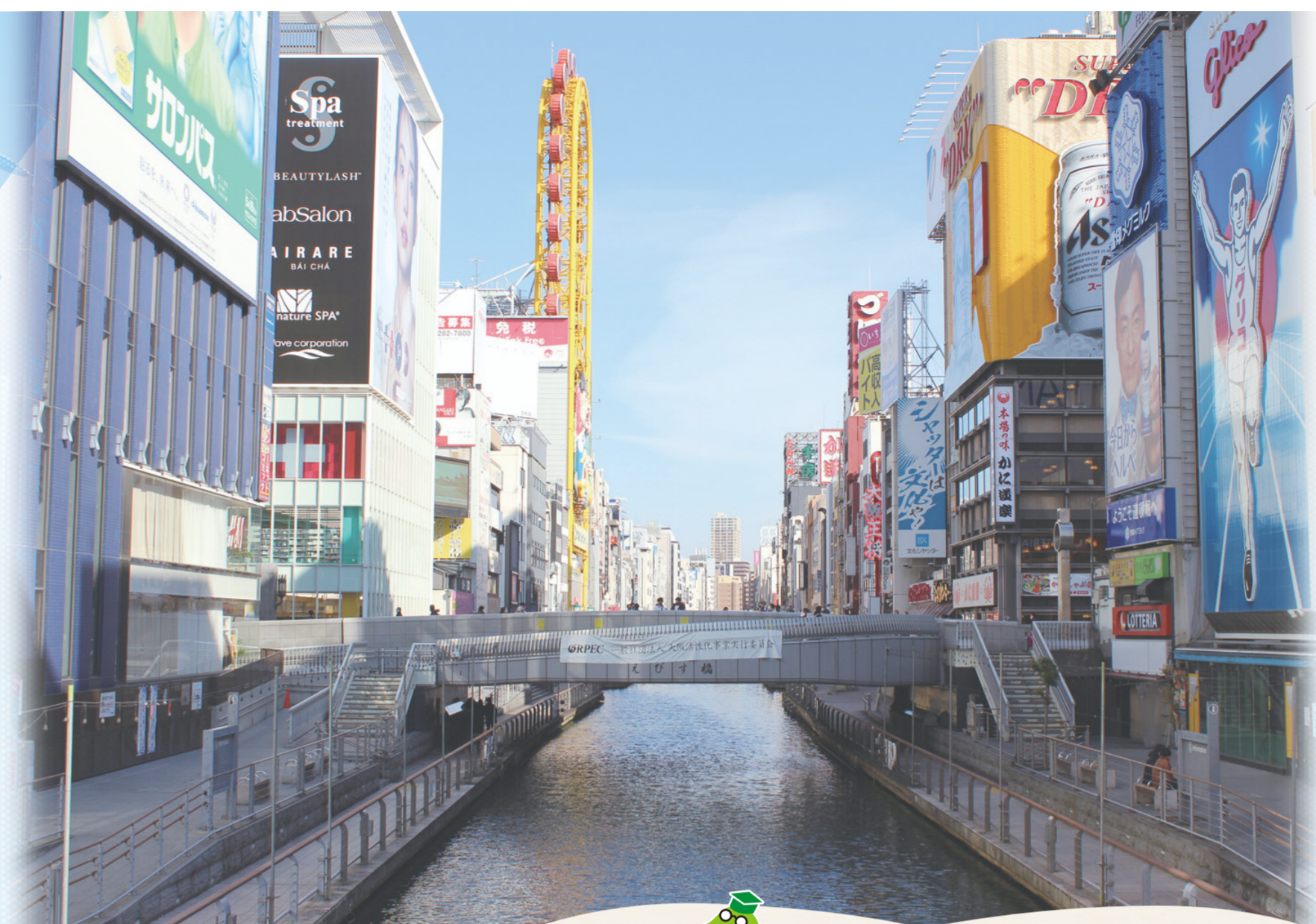
水の再利用が可能となるMBRの技術は、すでに世界で重要な役割を果たしている。中浜下水処理場にMBR下水処理システムを設置するクボタによると、水不足に苦しむ中東のオマーンやアラブ首長国連邦(UAE)では、下水を再利用するためにMBRを活用。下水処理場の建設用地が少ない中国北部の都市部でもMBRの導入が進むなど、すでに世界6000か所

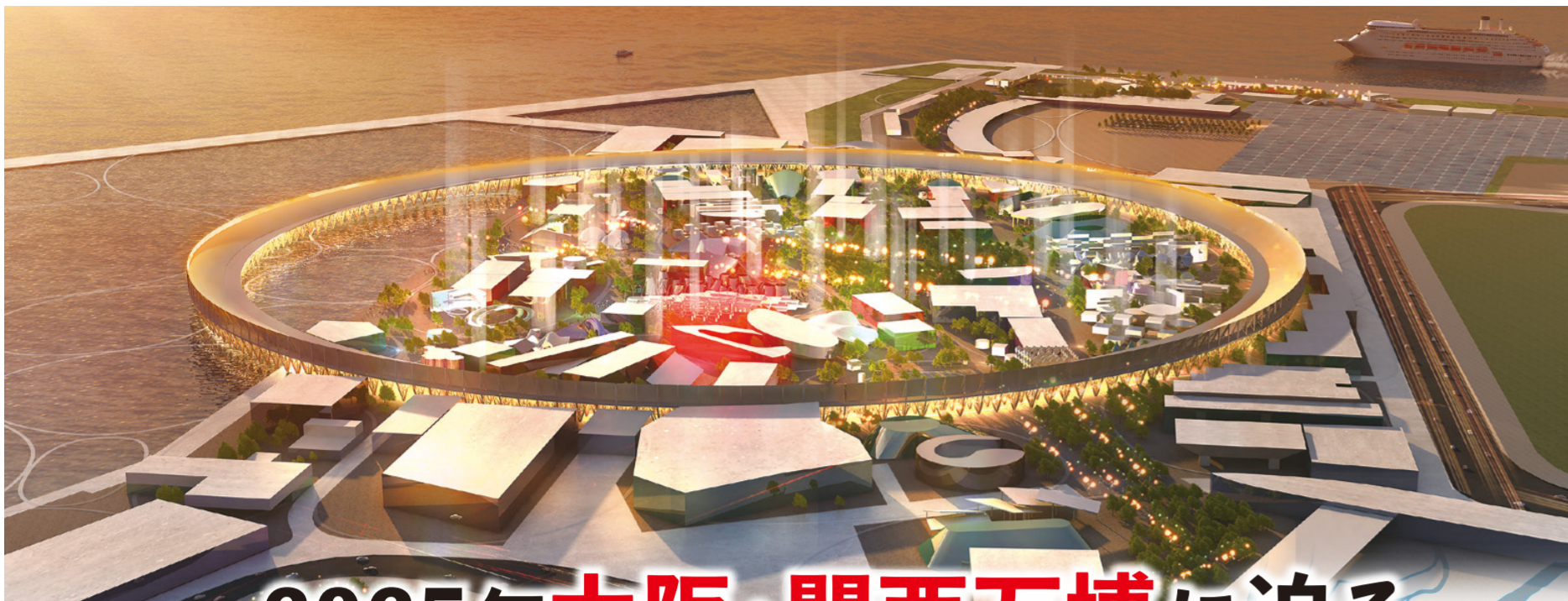
以上の水処理施設でクボタのMBRが活用され、その需要は拡大している。世界の水問題の解決は、国連が掲げるSDGsの目標の一つでもある。クボタ環境プラント技術部上下水大阪技術グループの都築佑子さんは「世界の水不足の解消やSDGs達成にMBRの技術で貢献したい」と話している。



株式会社クボタ

1890年、大阪府南区(現中央区)で創業。トラクタや田植機など農機の世界的メーカーとして有名だが、実はそのルーツは水事業。明治時代、国内ではコレラが蔓延(まんえん)しており、創業者の久保田権四郎は「コレラから人々を救いたい」との思いから、日本で初めて水道管の国産化を成功させた。現在は、上水道から下水道までをカバーする製品・サービスを手掛け、MBR技術でも世界大手の一角を占めている。





2025年大阪・関西万博に迫る



開幕が4年後に迫った2025年日本国際博覧会（大阪・関西万博）。「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマに掲げ、国連が掲げるSDGs（持続可能な開発目標）達成への貢献を目指して、世界中の人々とともに考える舞台となる。世界で猛威を振るう新型コロナウイルス感染症を乗り越えた先の「新たな時代」の万博は、どんなイベントとなるのだろうか。

SDGs達成を後押し

大阪・関西万博は、25年4月13日～10月13日、大阪市臨海部にある人工島・夢洲を舞台に開かれる。国内での大規模な万博の開催は、05年の愛知万博以来20年ぶりだ。今回は、150か国・25の国際機関の参加を目標に、国内外から約2820万人の来場者を見込む。

テーマは、「いのち輝く未来社会のデザイン」。世界中の人々がアイデアを出し合って「いのち」について考えるとともに、地球温暖化や貧困撲滅、エネルギー問題など、地球規模の課題の解決を目指す機会となる。

会となる。

このテーマの下で行われる一連の活動は、国連が掲げるSDGsとも合致している。SDGsは、世界で目標とする17分野の取り組みがある。そのひとつひとつの活動は、万博が提示する「いのち輝く未来社会」を実現する活動と重なっている。万博がSDGs達成に貢献することも、期待されている大きな役割だ。

さらに万博開催の25年は、SDGsの達成目標である30年のちょうど5年前。SDGsへの取り組みを後押しする絶好の機会となるため、世界に向けた「発信の舞台」となる万博が果たす役割は大きい。

最先端技術を体験

大阪・関西万博では、会場を「未来社会のショーケース」と見立て、世界の様々な最先端技術が披露される予定だ。参加国や企業が展示を行う「パビリオン」が建設されるほか、「空飛ぶクルマ」や「清掃ロボット」「自動翻訳システム」なども導入が検討されており、「新しい時代」を体験できそうだ。

また、会場に来ることができない人も参加・体験できるように、オンラインや仮想現実（VR）技術を導入し、会場の外でも楽しめる「バーチャル万博」の実現も目指している。

開幕前から万博に参加しよう！

▶「TEAM EXPO 2025」プログラム

万博を運営する2025年日本国際博覧会協会（大阪市）は、SDGsのような課題解決や、よりよい未来の実現に向けて取り組み企業や団体が集い、共創をはかる場として「TEAM EXPO 2025」プログラムを昨年10月から始めている。

「TEAM EXPO 2025」のホームページで活動を発信するほか、連携や交流の機会を提供などを予定しており、各参加者が力を合わせて理想とする未来社会を共に創り上げていくことを目指していく。活動の種類や規模は自由で、学校や家族などのチームでも参加でき、すでに部活動を「共創チャレンジ」に登録している学校もある。

「TEAM EXPO 2025」プログラムHP <https://www.expo2025.or.jp/team/>

▶教育プログラム

博覧会協会は、万博やSDGsへの興味や関心を高めてもらおうと、昨年10月から大阪府内の一部の小・中学校で教育プログラムをスタートさせた。来年度以降、関西圏へ、その後日本全国へ実施地域を段階的に拡大していく予定だ。協会が編集したテキストも、今年の春頃には協会のHPからダウンロードできるようになる。

*（滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県、鳥取県、徳島県）
協会HP <https://www.expo2025.or.jp/>

大臣に聞く

若者は大阪・関西万博にどのように参加し、楽しめばいいのか？万博を経験したことがない阪大生が、井上信治・国際博覧会担当大臣を直撃し、インタビューした。

万博はどんなイベントになりますか。

万博のテーマは「いのち輝く未来社会のデザイン」です。未来に向けて日本や社会をどう変えていくのか。生命科学や科学技術から、宇宙や海洋、デジタル化など、色々なことを想定して万博を作っていくので、楽しみにしてください。



井上大臣

若者は万博にどう関わればいいでしょうか。

万博はSDGsの目標と重なる部分も多く、面白いアイデアや意見があれば、若い皆さんもどんどん寄せてください。今の中学生・高校生は、万博開催時には社会人や大学生、高校生になった頃だと思います。万博では様々な展示やイベントを開催しますが、これは今の若い人が将来に向け、どういう社会を作っていきたいか、という未来像を示す機会でもあります。



井上大臣

この教材を読む若者にメッセージをお願いします。

万博が終わった後、明るい未来に向かっての歩みを担うのは、若者の皆さんです。そのためにも、万博では新しいチャレンジや、ワクワク、ドキドキするものにしますので、ぜひ会場に足を運んで、自分の目で見て、体験して、楽しんでほしいと思います。



井上大臣

万博の歴史

国際博覧会（万博）が初めて開かれたのは1851年のロンドン万博。日本の初参加は、江戸幕府や薩摩藩などが磁器などを出品したパリ万博（1867年）だ。

初めて万博が日本で開かれたのは、1970年に大阪府吹田市で開かれた大阪万博。アジアでも初めての開催で、「人類の進歩と調和」をテーマに、国内外から万博史上最多（当時）の約6421万人が訪れた。

大阪万博では、人類初の月面着陸に成功した米国の「アポロ計画」で宇宙飛行士が持ち帰った「月の石」が人気を集め、長蛇の列ができた。携帯電話の試作機となる「ワイヤレステレホン」や「電気自動車」など、現在につながる最先端の技術も披露され、科学技術が切り開く「未来像」に、日本中が熱狂した。



1970年の大阪万博。世界中の人々に「わいわい、あちこちで外国人との交流がみられた」

私たちにもできるSDGs



2030年までにSDGsをやり遂げるには、一人一人が「自分ごと」としてとらえ、第一歩を踏み出すことが大切だ。それぞれの小さな積み重ねが、着実にゴール達成の後押しとなる。身近な部活動を通して、同世代がチャレンジするSDGsの取り組みを紹介する。

ニッポンバラタナゴの保護活動



私立清風高校生物部



「ドビ流し」でヘドロを除去

絶滅危惧種であるコイ科の淡水魚・ニッポンバラタナゴの保護活動を22年間続けている。並行して、生息する池の水質や他の生物の調査研究を通じ、地域の人たちとの交流を温めてきた。

部員たちは毎月1回、大阪府八尾市東部の高安山麓のため池で定期調査を実施。その結果、ニッポンバラタナゴは二枚貝のドブガイに産卵する特性をもつことを確認。毒素を持つアオコなどの有害なヘドロがたまり、貝のすみかが奪われ、繁殖できなくなることを突き止めた。

地域には、池の底の栓を抜き、たまったヘドロを掃除する「ドビ流し」（池干し）と呼ばれる伝統行事がある。部員たちは毎年、地元の小学生たちと一緒に池干しを開催。ヘドロ



副部長の梶岡さん（左）と部長の野田さん（右）



ニッポンバラタナゴ（雄）とドブガイ



保護活動には水質調査や他の生物の研究が欠かせない

化したアオコを堆肥として利用するための研究も行ってきた。



活動を通じて、地元へ利益を

部長の野田晃司さん（17）は、「地域の人たちに目利益が生まれる仕組みを考え、生態系の保護と地域貢献を同時に行える活動の形を作りたい」と意気込む。同校の活動は、里山の豊かさを守り続けていくことにほか

ならない。それは持続可能な社会を目指すSDGsの理念にもつながる。副部長の梶岡久暉さん（16）は「活動を通じて、地元の人たちが元にある豊かな環境を再確認していくというサイクルが生まれた。部活動を続けるうち、ニッポンバラタナゴの保護という最初の目標から、いくつもの目標につながっていった。SDGsの考え方も、一つひとつが独立したゴールではなく、互いに絡み合っていることを実感できた」と話していた。



由良川の保全活動

京都府立綾部高校分析化学部



水温や透明度など水質の年間データを地道に蓄積している



最上位の水質を維持する由良川

校舎のすぐそばを流れる由良川の保全活動に取り組んできた。

具体的な活動として、まず挙げられるのは、水生生物調査だ。川の水質は、確認される生物によって4段階に分かれる。部員たちが確認した生物の生息状況から、由良川は最上位の水質を維持していることがわかった。

9年前から、年に1度開催している清掃イベント「由良川クリーン作戦」も重要な活動だ。当初は部活動として部員たちが清掃してきたが、ゴミが多すぎて拾いきれず、地域住民に協力を依頼した。それが今や、企業、

行政も巻き込んだ一大イベントに成長。参加者は当初25人だったが、200人規模にまで拡大した。



取り組みが成果を結び！

保全是息の長い活動だ。将来を担う子供たちのため、部員たちは毎年、地域の幼稚園、小・中学校へ出前授業に向かう。授業では、顕微鏡を使った観察実習やレンジャーショーを行う。わかりやすく、楽しく環境問題を学んでもらおうという狙いだ。昨年度、高校生の視点からSDGsを考える「SDGs Quest みらい甲子園」で、関西エリアの最優秀賞「関西アクショ

ン大賞」を受賞。地道な取り組みが評価された。

部長の浅田隼輝さん（17）は「由良川をきれいにするには、流域全体の協力が欠かせない。下流の府立海洋高校と流域ネットワークをつくり、共同研究も行っている。マイクロプラスチック問題は、河川沿いの住民たちにも原因があることを海洋高校から教わった。川をきれいにすることは

海洋汚染の防止につながる」と成果を実感している。

前部長の石井望翔さん（18）は、「おじいちゃんになってもきれいな由良川を散歩するのが、僕の夢。そのためにも、部の目標はさらに高く、『100年後にきれいな由良川を』。今の活動が今後も続いていくことが何より大切だ」と力を込めた。



地域の財産の由良川を「100年後も守り続けよう」と活動する部員たち

プロジェクトに参加した阪大生の編集後記

取材担当:P2-3

まずは自分の行動を見直してみる

江端木環さん

大阪大学大学院工学研究科
地球総合工学専攻 1年

世界中で「新型コロナウイルス」という共通の危機に直面し、みんなで協力して乗り越えていこうという状況下、感染予防の重要性から私たちは念入りに手洗い・うがいをを行うようになった。取材を通して、世界の貧しい国々に目を向けると、深刻な水不足によって手洗い・うがいどころか、清潔な水を飲むことさえままならない人々が勢いるということにハッとしました。「水不足」も世界共通の問題である。私は、今回取材した支援団体や専門家の方々のように、水問題に対して今すぐ活動を始めることはできないが、まずは、水を使える当たり前とその背景に目を向け、自分の行動を見直すことから始めようと思った。

取材担当:P2-3

世界の問題は他人事ではない

川口太郎さん

大阪大学大学院工学研究科
機械工学専攻 1年

「世界の問題は他人事ではない」。これは私が活動を通して得た学びである。私は「水問題は海外の問題」という意識がこれまで強かった。しかし、輸入品を介して私たちは海外の水を多く使用しており、世界の水問題は私たち日本人の問題でもあると気付いた。多くの世界の問題は日本人にとって決して無関係ではなく、世界の動向を注視しつつ、自分ができるところを模索することが重要だと思った。そしてその入り口はたくさんあり、持続可能な社会に向けて、私たちは水問題や食料問題など複数の問題を同時に改善する必要がある。今後は自身の研究と照らし合わせ、自分がどのように持続可能な社会の達成に貢献できるかを考えながら活動していきたい。

取材担当:P4-5

SDGsを身近に感じてほしい

北野翔大さん

大阪大学 経済学部
経済・経営学科 4年

SDGsの達成は世界的な大きな課題であり、身近なものであるとこれまで感じたことはなかった。今回の取材で道頓堀の清流化が進んでいることを知り、新しくなる下水処理施設で用いられている技術が世界の水不足の解決に貢献していることを知った。身近な存在である道頓堀川をきれいな川にしていこうと、SDGsの目標の一つである水問題の解決が繋がっていることを感じて、SDGsがとても身近なものに感じるようになった。SDGs達成のためにはそれぞれがSDGsを身近に感じる必要があると思う。これからは自分自身がSDGs達成のために今日からできることはないかを日常の中に見つけていきたいと思う。

取材担当:P4-5

多様なつながりに目を向けて

松竹夏鈴さん

大阪大学 法学部法学科 2年



私が取材を通して感じたのは、あらゆる要素の「つながり」を意識する大切さです。

例えば、道頓堀川は、ただそこを流れているのではありません。川を利用する市民や観光客、政策やメディア、技術、地理的状况、歴史や文化……等、様々な要素と関係し合って存在しています。

このように、皆さんも、何でもいので、何か身近なものを調べていくと、色々なつながりが見えてきて、気づくことがあるかもしれません。

特に、SDGs達成に向けて、あらゆる要素が複雑に絡み合う問題に取り組む際には、多様なつながりに目を向ける姿勢が非常に重要になってくると思います。

取材担当:P6-7

小さな意識をきっかけに

伊勢聡史さん

大阪大学大学院工学研究科
地球総合工学専攻 1年

私はこれまでの生活でSDGsに関してあまり考えることがなかったが、この教材作成に参加することがきっかけでSDGsについての関心が広がった。普段何気なく見流していた、ニュースや企業の広告で紹介されるSDGsの取り組みが目につくようになり、様々な人が様々な形で活動していることを改めて感じた。そして私にも協力できることはないかと考えるようになった。この教材を読んでもくれた皆さんに私はSDGsの活動参加を強制しようとは思わない。一つだけお願いするならば、SDGsという目標に向けて頑張っている人たちがいることを頭の片隅に入れてほしい。そんな小さな意識をきっかけに、自分にできるSDGsを考えて取り組む姿勢へ、少しずつ成長していけばいいと思う。

取材担当:P6-7

身近なところからアクションを

島田広之さん

大阪大学大学院文学研究科
文化形態論専攻 1年

2025年日本国際博覧会協会と高校生のインタビューを担当。SDGsを見据えながら、身近な課題に取り組んでいる高校生たちの姿が印象的だった。自分たちの取り組む課題の背景に別の課題が隠れていることに気づいたり、他の学生との交流で、関心のなかったテーマに興味を持ったりと、自分たちの活動をSDGsを通してみることで、新たな視点や学びを得ていた。自分たちが活動する際も、SDGsを通して活動を見つめることが大切であると感じた。2025年大阪・関西万博では、万博開催前より様々なイベントが準備されている。読者の方も、このような機会も活用しながら、誰一人取り残さない未来社会の実現に向けて、身近なところからアクションを起こしてもらいたい。

読売新聞 SDGs教材共創プロジェクト Supported by クボタ

大学生から中学生へSDGsに取り組む意義を伝え、その中学生が成長し、また次の世代へ——。教材づくりを通じた、若者による若者のためのSDGs教育の循環を創出し、持続可能な未来社会の実現を目指すため始まったのが「読売新聞SDGs教材共創プロジェクト Supported

by クボタ」(協力：大阪大学社会ソリューションイニシアティブ(SSI)、国際協力機構関西センター)。

初回となる本年は、SSI協力のもと、阪大生6人がプロジェクトに参加し、コロナ禍で厳しい環境の中、リモートでの取材を中心に記事を執筆し、この教材を完成さ

せました。このプロジェクトは2025年日本国際博覧会協会が取り組むプログラム「TEAM EXPO 2025」の「共創チャレンジ」に登録されており、SDGsが達成された社会を目指すため開催される2025年の大阪・関西万博に向けて、継続的に取り組んでいく予定です。



For Earth, For Life
Kubota

ON YOUR SIDE

1890年の創業から「食料・水・環境」の課題解決に向けて歩んできたクボタ。
これからも一歩一歩、すべての人と心をひとつに、明日へと進み続けます。

株式会社クボタ